悪性黒色腫 インターフェロン治療

国立がん研究センター中央病院皮膚腫瘍科 並川健二郎

KEY WORDS
●インターフェロン
●悪性黒色腫
●術後補助療法
●JCOG1309

Adjuvant interferon for cutaneous melanoma.
Kenjiro Namikawa

はじめに

インターフェロン（interferon；IFN）は，これまでの悪性黒色腫に対する薬物療法において，最も多く再発予防目的に検討されてきた薬剤である。本稿では，IFN を用いた悪性黒色腫の術後補助療法について概説する。

Ⅰ．IFN とは

IFN はサイトカインの一種であり，結合する受容体の違いからⅠ型，Ⅱ型，Ⅲ型に分けられる。ヒトⅠ型 IFN は産生細胞などの違いから IFN-α，β，ω に分けられ，ヒトⅡ型 IFN は IFN-γ を指す[1]。医薬品としては，IFN-α，β，γ が製剤化されており，IFN-α にはポリエチレングリコールを結合させ半減期を長くした Pegylated IFN（Peg-IFN）もある。従来，抗ウイルス作用のみが知られていたが，その後抗腫瘍作用も有することが見いだされた。

わが国で術後補助療法として頻用されてきた天然型 IFN-β（フエロン®）は，国産技術によるわが国初の IFN 製剤で，東レ株式会社と第一製薬株式会社（現 第一三共株式会社）との共同研究により開発された。1985 年に膠芽腫と皮膚悪性黒色腫に対する薬事承認を，その後Ｂ型肝炎，髄芽腫，星細胞腫，Ｃ型肝炎に対する薬事承認を得た[2]。

IFN-β の抗腫瘍作用の機序の詳細はいまだ不明な点が多いが[3]，腫瘍細胞表面に結合して増殖を抑制する直接作用と，宿主の腫瘍免疫を活性化することにより腫瘍の増殖を抑制する間接作用が考えられている。直接作用については，ヒト悪性黒色腫由来細胞株（HMV-1）で DNA への [3H] チミジンの取り込み量の著明な減少がみられることで DNA 合成抑制作用が確認されており[4]，間接作用についても，皮膚悪性黒色腫患者に本剤を局注した後の病理組織学的検討により，腫瘍巣の構造が破壊され腫瘍細胞にリンパ球の付着が

SAMPLE
Copyright(c) Medical Review Co.,Ltd.